

教師の子どもへの証言的裏切り

ー 不正義に抵抗する教師の徳 ー

松本 大輝
教科領域コース

1. 概要と目的

教育的関係を成立させるうえで、子どもが教師へ向ける信頼は重要な要素である。しかしながら、信頼を揺るがす、次のようなケース¹が起こっている。

ウガンダ共和国と日本にルーツをもつ三浦アークさんは、中学生時代、クラスメイトに外見の違いからいじめをうけていた。アークさんは、担任教師にいじめのことを相談したにもかかわらず、その教師に「アークは違うから、みんな言うのは当たり前」と言われ、取り合ってもらえなかった。アークさんは、このような人種差別と結びつきたいじめを受けていることと、それにもかかわらず教師に誠実に取り合ってもらえなかったことが重なり、やがて不登校になってしまったのである。アークさんは、当時を振り返って「自分が何者かわからなくなった」と述べており、このような経験が、アークさん自身に対する自信を喪失させてしまうことにつながったのだ。そして、進学先の高等学校でも「目立ちたくない」という思いを抱き、ふさぎ込んでしまったのである。

アークさんの受けたような、人種、民族、階級、社会階層、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍などの社会的アイデンティティに対する悪質なステレオタイプが原因で、一部の人々が知識の主体としての能力を貶められる不正のことを「認識的不正義 (epistemic injustice)」(Fricker 2007)という。この認識的不正義のなかで、焦点をあてて考察するのは、アークさんが教師から受けたような、話を聞いてくれるだろうと信頼していた聞き手から裏切られ、心理的に深い傷を負った「証言的裏切り (testimonial betrayal)」(Wanderer 2017)のケースである。

本稿の目的は、教師と子どもの関係における証言的裏切りを批判的に検討することで、教師と子どもの関係において生じる固有の証言的裏切りがどのようなものなのかを明らかにし、教育における証言的裏切りに適切な仕方に対応する教師の徳²のあり方について示唆を与えることである。

2. 証言的裏切り

フリッカーは、認識的不正義として「証言的不正義 (testimonial injustice)」と「解釈的不正義

¹ 三浦アークさんの例は、以下の2つを参考に記述している。

日本放送協会 (2020, December 2) . マイクロアグレッション 日常に潜む人種差別の“芽”. <https://www.nhk.or.jp/minplus/0018/topic008.html>

Glocal Cinema Meetup! (2021, March 18) . *Ark & Maya: All Mixed Up*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=NWeg34noE0Y>

² 徳 (virtue) とは、よい人生を送るなど、幸福 (eudaimonia) へ向かう人間固有の機能を指す。

(hermeneutical injustice)」の二種類を提示した(Fricker 2007)。本考察の中心的論点である証言的裏切りは、証言的不正義の一形態である。証言的裏切りの議論の準備として、証言的不正義について、知人女性の証言を通じて「次の市長選は〇〇さんが勝つだろう」というケースを考えよう。このケースで、女性というアイデンティティに対して「女性は短絡的かつ感情的であるから政治的判断力に乏しい」という偏見をもっている聞き手は、この女性の証言を疑ったり、全く信じたりしないかもしれない。このように、聞き手が話し手のアイデンティティについて、偏見のせいで生じるステレオタイプを抱くせいで、話し手の証言の信用性 (credibility) が不当に割り引かれる不正義が証言的不正義である。これにより生じる害は、偏見がなければ伝達されるはずの知識の喪失や、その人が証言者としての信用性が低く評価されて、沈黙させられてしまうことである。

証言的不正義が発生した現場に、信頼が元々存在していた場合に、どのような害が生じるかについて考察したのが、ジェレミー・ワンダアー (Jeremy Wanderer) の証言的裏切りである。ワンダアーは、厚い信頼関係が成立している間柄で証言的裏切りが生じるとしている。厚い信頼関係とは、聞き手と話し手が互いに承認し合っている間柄のことである。すなわち、この間柄は、友達、家族、社会的役割によって親しさが生じる教師と子どもの関係など、身近な関係のことである。証言的裏切りが発生する理由は、承認の関係を片方が思い込んでいるケースや、一方的な拒絶や無視があるからである。証言的裏切りの害は、裏切られた側が、裏切った側へ寄せていた期待を裏切られることで、深い心理的な傷を負ったり、人間不信に陥ったりすることである。

3. 証言的裏切りの諸相

ワンダアーの証言的裏切りについて分析すると、二種類の証言的裏切りにつながるケースを考えることができる。

一つ目は、証言的裏切りの量的考察である。一度の証言的裏切りの心理的害に着目すると、その害には大小の差があると考えられる。たとえば、身近な関係で生じる日常的な裏切りは、他者へ寄せていた期待が意図的に無視されたり、気づいてもらえなかったりする期待外れの形態を取るだろう。このような裏切りを「小さな裏切り」と呼ぼう (松本・佐藤 2024)。小さな裏切りは、信頼が欠如するという経験である。この積み重ねが、信頼していた相手を、徐々に信頼も不信もしていない存在や、不信する存在へと変化させるだろう。小さな裏切りの積み重ねがあった場合の害は、被害者へ決定的な影響を与える証言的裏切りと同種のものであると言える。

二つ目は、社会的役割や権力などに非対称性が認められる、教師と子どものような人間関係で、優位な側が相手の期待を知ったうえで、その成長や発展を願って「あえて」応えないという対応である。このような対応について、シャノン・ブリック (Shannon Brick) は、子どもと教育的立場にある人の例を挙げ、あえて子どもの期待に応えないで、子どもが自分で問題を解決することができるかのように、信頼を拡張することを「希望に満ちた信頼 (hopeful trust)」と呼んでいる (Brick 2020)。希望に満ちた信頼を子どもに置くことで、子どもが自分で何かの問題を解決するなどの成功体験を通し、認識的・道徳的に発展していくことができるとされる。この子どもの成長のために有効な手立てである対応であっても、寄せられる期待に優位な側が応えなかった場合は、裏切られた側の視点に立つと (小さな) 裏切りにつながる場合がある。それは、希望に満ちた信頼を置いている相手

に、「私はあなたを信頼している」ということを伝えるのを怠った場合である。また、理不尽な要求や、振り返った時に自分が受けた対応について肯定的な解釈ができないような場合も裏切りにつながる場合がある。

4. 教師と子どもの関係における証言的裏切り

これまでの議論を踏まえると、教師の子どもへの証言的裏切りは、三種類に分けられる。

決定的な裏切りは、あまり犯すことのないが、教師が子どもに対して偏見を持つことで、故意に子どもを配慮せずに突き放してしまうような不適切な指導や配慮に欠けた発言が該当する。

小さな裏切りは、教師が子どもから寄せられるすべての期待には応えることが不可能であるために生じる。たとえば、教師が多忙な中で多くの子ども達とかかわらなければならない状況で、教師の裁定者としての役割に機能不全があったとする。この機能不全は、子ども達が、「あの子は怒られなかったのに、私は怒られた」といったような教師の裁定者の能力への不信につながる。このことがきっかけで教師の他の能力に不信が広がり、教師の声が子どもに届かなくなってしまう場合があるだろう。

意図的な裏切りは、希望に満ちた信頼を子どもへ置くのが、子どもの成長を促すのに有効だとしても、教師が子どもへ「見守っている」ということを伝えなかったり、子どもが感じられなかったりしたときに生じる。また、教師が期待を誤って認識してしまった場合にも生じる。そもそも、制度や様々な制約により、すべての子どもに希望に満ちた信頼を置くことは難しいかもしれない。

教師の子どもへの証言的裏切りの深刻な害は、子どもが教師に認識的に依存しなければならない学校などの教育環境で、子どもが知識獲得の機会を失ってしまうことである。さらには、裏切りにあったせいで心理的な傷を負い、自分への自信を喪失してしまうこともある。なお、このような証言的裏切りの積み重ねによって、教師の能力への不信感が、別の教師に伝播し、学校というグループへの不信につながることもあるかもしれない。

5. 教師の徳

中央教育審議会の答申や各教育委員会の掲示する「求める教師像」では、子どもに寄り添い、子ども一人ひとりの期待に応えていくような、理想的な教師像が示されている。しかし、教室で教師は、多くの子どもからの応えきれないほどの期待を寄せられており、それに丁寧に応えていくことは様々な制約のもとでは不可能なように思われる。また、教育は不健全な認識環境になりうるものであることも考え合わせると、理想的な教師像や、教師と子どもの理想的な信頼関係を挙げるだけでは、聖職者的な教師を想起させることにつながることもあるだろう。このような理想は大切ではあるが、実践的に有用な指南とは言えないと考えられる。

子どもたちの教師への期待を裏切らないために教師に求められるのは、子どもの期待の把握や分別にかかわる「教師の徳」である(松本・佐藤 2024)。具体的には、教師と子どもの関係を踏まえ、子どもの期待に敏感であることで、証言的裏切りを最低限起こさないようにする実践的な徳のことである。この徳は、対人関係においてプラスにならないとしても、児童や生徒にマイナスとな

るようなことを察することで事前に対処できたり、局所的に小さなマイナスとなることを犯したとしても、その時点でそのことに気づいて反省し、それ以上、決定的な裏切りにつながるようなことは避けたりするための能力である。

子どもの期待への応答は、子どもから寄せられる期待を知り、それへの対応を思考し、実際に対応するということになる。この3つのステップを踏める教師は十分に有徳な教師であり、現場の教師は、このようなステップを踏める人がほとんどであるように思われる。しかし、有徳な教師である、もしくは、有徳になっていく途上の教師であったとしても、場面ごとに、教育が不健全な認識環境であることや教師の仕事の負荷や境界性のなさなどに起因する困難が生じている。このような困難に抵抗するための教師の徳に共通するのは、教育現場の様々な制限を理解し、できる範囲で有徳さを発揮するということである。子どもの期待を知る場面では、教師が知りえない子どもの期待を取捨選択することがあるだろう。思考の場面では、自身の思考が凝り固まらないような自浄作用を働かせるための反省を適度に行うことが大切だろう。実際に期待に応える場面では、他の教師とフォローしあうことで、上手く対応することができると思う。

このような教師の徳を磨くためには、上手くやっている教師の手本を見ることが、子どもの認知や子どもとの信頼関係を築き発展させていくための心理学的な理論を学ぶことなどがあるかもしれない。しかしながら、教師の徳を発展させることにも制限が加わるように思われる。たとえば、教師が多忙であることにより、他者の対応を見学に行けないといった知識へのアクセス制限があるだろう。また、種々の心理的負担により追い込まれてしまい、よりよい思考に至れなかったり、学びにむかう意欲が低下したりすることがあるかもしれない。制限や負担の解消には、教師個人のできる範囲では限界があり、人員や研修機会の増強など、環境面の支援が求められる。

6. 今後の展望

本考察は、子どもと教師の関係で、信頼関係が成り立つ場合を想定している。このことによつて、子どもが心に傷を負っていないことや、教室で学級崩壊など深刻な問題が起こっていないなど、理想的な状態がある程度想定されている。さらに困難な状況にある現場もあるだろうし、そのような場所で不正義に抵抗するには、別種の教師の徳が求められるだろう。

主要参考文献

Brick, S. (2020). "Epistemic Neglect". *Social Epistemology*34:5(pp.490-500).

Fricker, M. (2007). *Epistemic Injustice*. New York: Oxford University Press. (邦訳 ミランダ・フリッカー (著)・佐藤邦政(監訳), 飯塚理恵(訳)(2023)『認識的不正義 権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』勁草書房.)

松本大輝・佐藤邦政 (2024)「教師の子どもへの証言的裏切り-不正義に抵抗する教師の徳に向けた予備的考察-」『茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学、芸術)』,73号 (pp.1-13)

Wanderer, J. (2017). "Varieties of Testimonial Injustice" In Kidd, Ian J. Medina, José & Pohlhaus, Gaile (Eds.). *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice* (pp. 27–40). NY: Routledge